

2015 年度国際哲学特講レポート「海外研修を終えて」

※以下、2016年2月4日-11日に行った「国際哲学特講」アルザス海外研修について、Aが「感想（感じた事）」、Bが「考察（考えた事）」です。①～⑧まで、参加の学生8名から帰国当日中にということで分量自由で提出させました。（安孫子）

①

A

外国を訪れるのは初めてのことで、目に映る全てのものに興味をひかれましたし、全ての経験が貴重な思い出になりました。12時間のフライトや時差ボケ、異国の街並みや道行く人々といった見聞きし体験した記憶が今でも鮮明に思い出されます。

戦火を免れ昔ながらの姿を保っている市街に赴いた際は、まるでフィクション作品の世界の中を歩き回っているような気分になり、写真撮影をやめられませんでした。城のある高台からその街を一望した時は感動すら覚えました。大学では歴史と伝統に色どられた建物の中で現地の学生と共に学ぶことができ、一生を通じてもそう無いだろう大変得難い経験になりました。

また、そういった街や大学を案内して下さったガイドの方や現地の教授や学生の方々との出会いことができたのもこの研修の大きな収穫でした。どなたも笑顔で迎えて頂き、流暢な日本語で話しかけてきて下さったのでとても安心できました。

B

出会った人々のほぼ全員が2～3か国語を話すことができ、中にはそれ以上の数の言語に精通している方もいて、自分からすると驚嘆してしまうようなことでしたが、お互いの国の距離が近いあちらの方では珍しくないという事実を改めて実感しました。また、今まではとりあえず単位を取り卒論を書き就職する、とくらいに考えていた自分の進路についても再考の余地があると思うようになりました。行動を共にした先輩には一度卒業してから海外で院に行き再就職するという方もいて、他にも様々な興味深い話を聞くことができました。学びたい、体験したいという意欲と行動力があれば、いつからでも自分の進みたい道に向かっているのだなと感じ、帰国してからも色々と調べてみたいと思えたのもこの研修から得られた良い影響です。

鉄は早いうちに打てといいますが、いくら鮮烈な体験をしたからといってすぐに何もしないのではせっかくの研修の経験値が100%活かされないと思うので、まずは自分が学んできたドイツ語やフランス語をもっと学び直そうと考えています(2年習ったのに全くダメとはあちらの方の前ではとてもじゃないですが言いづらかったです)。

交換留学やその他もろもろについては、今すぐは決められませんが自分の進みたい道を

考えたり親と相談もしながら考えていきたいと思います。

とにかく素晴らしい経験ができたので、その経験を自分の将来に還元できるように取り組んでいきたいです。

②

A

2月4日から10日かけて、ドイツとフランスで行った研修では、やはり初めてのヨーロッパということで驚くことがたくさんあった。

まず、初めに驚いたことはこの研修中支えてくれたストラスブール大学のフランスさんとヘイさんについてである。彼女たちは、まず言語は何不自由なく使いこなせる。それにとっても色々なことに詳しく、土地の歴史や豆知識を必ず教えてくれた。彼女たちのような力はあまり日本では見られないように感じた。彼女のたちのおかげで最初から最後まで安心して、大いに楽しむことができた。

また、町の見学については初めて知る歴史がたくさんあった。特に私たちが行ったハイデルベルクとアルザスはちょうど国境線の場所にあり、歴史が深い。今まで国境線を渡ることはなく、その土地について聞いたこともなかった。しかし、そこに住む人たちにとって歴史的に様々な思いがあるようだった。そして今回町の見学でキリスト教に触れることがたくさんあった。教会にも初めて入る私にとって、キリスト教に触れることはとても印象的だった。まず教会に入った時、ステンドグラスや彫刻などの威厳に心を掴まれた。ずっとそこにいたいような気持ちにさせられた。しかし、知識不足で、もっとキリスト教について知りたいと思ったので改めて勉強したいと思う。

そして、ハイデルベルク大学とストラスブール大学でのゼミ、また先生たちの講演において学んだことがたくさんある。まずハイデルベルク大学とストラスブール大学の生徒たちとの会話で言語的に困ることはなかった。皆日本語がまず上手で、私たちですら理解するのが難しい教材もきちんと調べ理解している。これには本当に驚いたし、自分の勉強不足を思い知らされ、少し恥ずかしさも感じた。また、発表に向けて日本とヨーロッパの違いについて考察をしていたが、やはり実際に行ってみると印象は少し違ったように思う。日本で勉強しているときには、ヨーロッパと日本はやはり思想的に違うし、精神的にも全く異なったものだと感じていた。確かに違うところはたくさんあったが、一緒に議論していると、意外にも日本と共通することも多々あった。それは、研修に来て共に学ぶことで初めて分かったことだと思う。だからこそ、本当にこのような形でヨーロッパの学生と学ぶことができて良かった。

国際哲学特講を受講し、最初はやはり教材を読むのに苦労した。テスト期間に入ると余計に忙しく、辛いこともあったように思う。しかし、この研修で様々なひとに出会い、様々な場所に行った経験は私の価値観を大きく変えたし、確かに自分の身になったと感じる。

この経験を活かし、あと2年の大学生活を有効に使いたい。

B

私はこの研修を通して学んだことがたくさんあるが、一番考えさせられたのは、日本とヨーロッパの学生の違いである。この違いには最初から最後まで驚くことが多かった。

まず、違うのは圧倒的な言語の能力である。私たち日本人は小さい頃から英語を勉強したり、高校や大学になれば他の言語を学ぶこともある。しかし、実際に満足にそれらを使える学生は何人いるだろうか。私も高校の頃から英語は好きだったが、受験が終わるとだんだんとその能力は落ちた。たまに英語で話しかけられてもすぐにコミュニケーションをとることが難しい。そのたびに勉強しようと感じても実際に努力することはできなかった。私だけでなく、日本にはそういう学生が多いと感じる。しかし、ヨーロッパの学生は違う。まず、今回関わった学生たちは日本語学科の生徒ということもあり、日本語はほぼ問題なく使えていた。私たちでも読むのに苦労する教材を読み、議論できる。それに、能力だけでなく、喋ろうとしたり、学ぼうという姿勢があった。日本語で理解できないものがあれば、辞書で調べたり「それはこういう意味ですか？」と理解しようと歩みよってくれた。間違える事を恐れず、積極的に言語を使おうとするその姿勢が彼らの能力を上げているのだと感じる。

そして、ヨーロッパの学生は常に志があるように思えた。なぜ大学に入り、なぜ今いる学部を目指したのか。また、今後何がしたいか。そういう目的や将来像がはっきりとしている。日本にもそういった生徒はいるかもしれないが、そうでない学生が最近が多いように感じる。日本でだいたいどの学生になぜ今いる学部を選んだか訪ねても、明確な答えは返ってこない。また将来何がしたいか分からないという学生が本当に多い。ストラズブル大学の生徒さんとお昼を食べているときに話した内容からもそういう違いをひしひしと感じた。それはテイファニーさんに聞かれた質問である。彼女に突然「結婚したら主婦になりたいですか？」と聞かれた。最初はなぜそういう質問をされたか分からなかった。すると、彼女は「留学したときに、日本の大学の友達が結婚したら旦那さんに稼いでもらい、自分は主婦になりたいと言っていた。その友達だけじゃなく、他の女の子もそう考えている人が多かったので、ショックを受けた」と言った。その理由は、フランスでは義務教育以上の学問を学んでいたら、その経験を生かして働くのが普通で、それなのにただ主婦をするというのはもったいないと思われるからだそうだ。私はそれを聞いた時に確かにそうだと感じた。ヨーロッパでは何か将来したいことがあるからこそ、そのための学問を学ぶために大学に入るのだと思う。しかし、日本の学生はそれが曖昧だ。就職したいから、幸せになりたいから大学に入る、そういう学生が多いのではないだろうか。しかし、そういう曖昧な理由であれば学問を楽しむことはできないように思う。だからヨーロッパと日本の学生の学問に対する姿勢が違ってくるのではないだろうか。また、ヨーロッパでそういう風に男性も女性も平等に学び、働き、自立しているのは社会の影響も大きいと思う。

町中で、男性が子育てをしている様子が多くみられた。日本でも平等になりつつあるが、やはりまだ世間は昔の風習が残っている。だからこそ学生だけの問題でなく社会も変わらなければならないと感じた。

そういった言語の違いや、学問に対しての姿勢の違いを研修中感じ、私はこのままではダメだと思った。強みが今の自分にはない。ヨーロッパの学生たちと関わり、それを強く感じた。国際哲学特講の授業で、教材を読むだけで難しく辛く感じていた自分が少し恥ずかしくも思える。研修を通して改めて自分が本当にやりたいことは何か考えさせられたし、見直そうと感じた。その上で学問に対して積極的な姿勢で臨みたい。三年生になると、ゼミが始まる。ゼミの中で今回の研修を活かしたい。また、言語についても今一度学びたいと思った。またヨーロッパの生徒とこういった関わり方がしたい。それにその時には、負けない強みのある自分になりたいと感じる。

③

A

まずはじめに、2/4～2/11のアルザス研修に参加することができてよかった。国際哲学特講をはじめて知った一年生の時から絶対に参加すると決めていただけに、参加することができると思ったときは大変嬉しかった。また、授業で取り扱われる内容は難しく、考えさせられるものであり、やりがいは十分であったが、授業中の発言やレポートで提出した自らの考えは、その時の最善ではあったにしろ、不十分と思われるものであったと感じており、悔いが残っている。

今回、アルザス研修という事で実際にドイツ・フランスに行くことができた。学生の時代に色々な土地に『旅行』という形で足を運ぶことは多いとは思いますが、現地の大学に行き、教室で現地の学生と授業を行い、学食を利用したり、数日間行動を共にするということはできないことであろう。また、徳江先生をはじめ、多くの方々のご協力のもと各所の”満喫プログラム”も組み立てられており、私にとって未知の土地であったはずの”アルザス”が身近な場所、自信をもって多くの人に薦めたいと思える場所になった。

最も印象に残ったことということであるが、正直、訪れた全てが私には印象的で(このように言うと、”一億総懺悔”のように、どこか無責任で、薄っぺらいように思われるかもしれないが)、どれかひとつに決めることは実に難しい。しかしあえて挙げるとすると、”そこで出会った人達”である。

私は、随分前から留学に興味があった。しかし、今の私の状態をみればわかるように、それに対する行動を起こすということは一切していない。それは、後の考察の部分において示す「積極性のなさ」ももちろん原因として挙げることができるだろうが、もうひとつは、”留学”の神聖化にあるとおもう。つまり、私なんか留学という素晴らしいことをできるはずがないという考えを私自身が形成し、本来の自分の目標であるはずの留学から目を背

けようとしていたのである。

しかし、今回の研修で出会った人々というのは、自らたてた目標に努力を惜しまず、目も背けず、楽しんで、挑戦していこうという気持ちでいっぱいであったのである。誰か一人というのではなく、全ての人がそうであったのだ。その事に気がついたとき、胸の奥の言葉に表すことのできない部分が握られたような、何とも言えない焦りを感じた。また同時に、留学という目下の目標に目を背けず、しっかり向き合っただけで努力をしていこうという決意を新たにすることができた。元来怠け者であるということ自認しているだけに、不安の方が大きい、めげそうになったり、努力を怠ろうとしたときには、今回であった全ての人々のことを思い起こし、目標に向かって邁進していこうと強く決意した。このように思えたのも、今回の出会いがあってこそであるだろう。本当に、参加することができてよかった。

B

先ほど留学の件についての考えを述べたときに出てきたことであるが、今回の研修の中で私が強く感じたのは、私自身の「積極性のなさ」である。

自らの積極性のなさというのを感じるのは今回がはじめてということではない。今回のように”はじめまして”の人が多くいる場合にはよく感じる。以前よりはよくなったとはいえ、やはり大人数になるとどうしても自らの考えを主張し、会話に参加するよりも、人の話を聞き、質問されたときだけ答えるという会話の形式をとりやすく、受け身の状態であることが多い。今回の研修においてそのような私の状態は致命的であった。もちろん、少人数になれば会話に参加することができたのでそういった意味では多くの人と、ある程度個人的な会話をすることはできていたが、どんな状態であれ話に加わろうとする意思をもつことは大切である。

また、そのような積極性のなさを助長させている原因として、自身の話題のなさもあるのではないだろうか。例えば今井君は、多芸であって、また知識も豊富で話題に事欠かないようにおもえたり、まいこさんも、尺八をやっているという事で、日本を発信するには最適であったように思う。

はたして私はなにを話題として提供できるのか、日本のことを発信しようにも私には知識もなく、今までの経験を話そうにも、思い返してみれば、話題として提供できるほどの経験もない。今回の研修は、移動の時間も長く、以上の事柄について考える時間が豊富であった。

そして、このことを考えることは、自身を売り込もうとする状況、すなわち就職活動の時にも多いに役立つであろう。また、話題性の不足を自覚できたことでこれからの生活をもっと有意義なものにしていきたいと決意することができた。

私は留学をしたいと思っている。それは、日本以外のところから日本のことについて考えたい、日本と海外についての比較をして、自らの考え方に広がりを持たせたいという思い

からであるが、このように自らの積極性のなさや話題の不足さをもついまの私のままではその目標を達成できはしないだろう。語学の勉強に励むと共に、私自身を豊かにしていく必要もある。この事を認識することができたのは本当に良かった。

話題を増やすことはそう簡単にはできないであろうから、まずは積極的になる努力をしていこうとおもう。幸い、新学期に移行する期間であって、心機一転するには実に良い時期である。ひとつ成長した私になりたい。

④

A

私はヨーロッパに行くのは今回が初めてだったが、この旅行を通して本当に貴重な体験ができたと思う。現地の人や土地や物に触れる度に感動し、また色々と自分の中で考えることがあった。まずはその感じたことを述べたいと思う。

今回の旅行で何が一番印象的だったか、と問われれば、私は真っ先にヨーロッパの人々の'人当たりの良さ'を挙げる。日本人の礼儀正しい部分や温かさとはまた違ったものを、私は現地の人々とのかかわり合いで感じる事ができた。例えば、ちょっと道ですれ違った人でも、目が合えば「Bonjour」と声をかけ、微笑んでくれる。日本、特に東京ではそういうことはほぼなく、目が合うと逆に逸らされる文化が主流であると思う。たまに「こんにちは」と声をかけられる時があれば、「今日は良い日だ」とさえ感じたりする。しかし、ヨーロッパの人々、特にフランスの人々にとってはそれが普通にあることにとっても感動した。お店でも「Bonjour」「Merci」と声をかけ合うことは普通のことなのであって、入店の際、私が笑顔で挨拶するだけで、「にこやかで良いわね！」などと言われたりもした。私はそういった人とのかかわり合いというのが好きな人間なので、この旅行の日々を終始良い気持ちで送ることができたのは、そんなヨーロッパの人々との触れ合いの部分の影響が大きいと思っている。

一方、そういった'人当たりの良さ'というものが定着しているヨーロッパで、スリが多いというのは大きな疑問である。フランスに行く前から、フランスに住んでいたことがある知り合いに「スリや犯罪には気をつけて！」と口うるさく言われていたのだが、正直ここまでだったとは現地に来るまで信じられなかった。写真を撮ってもらおうと他人に携帯電話を渡すことやポケットに携帯電話を入れることなど、日本で日常的に行われていることが出来ないというのは私にとって大変不便であり、生きにくさを感じた。外に出る際は終始気を張っていないといけなような気がして、非常に辛かった。なのでその点は日本の方が住みやすいなと感じた。

現地に行ってみて、改めて日本の方が良いなと思った部分は他にもある。トイレや街の衛生面などは日本の方がやはり素晴らしいと感じたのは仕方のないことなのかもしれないが、何より私が現地で驚いたのは物乞いの多さだ。街を歩く度にすぐに目に付く彼らは、

日本ではまずなかなか有り得ない光景だと思った。というのも、日本ではホームレスであっても物乞いはしないし、今まで私は日本で物乞いに出会ったことはないように思う。現地で実際に物乞いにお金を渡している人を見てはいないが、物乞いがこんなにも存在するという事は、それだけこの行為によって集まるお金があるのだと思った。彼らが私に何か直接的な危害を加える訳ではなかったし、また物乞いにお金を渡すという点でヨーロッパ人の'人当たりの良さ'というのを再確認するのでもあるが、でもやはりそんな彼らに声をかけられることは怖く、日本との治安の違いをスリ同様に感じた。

人との繋がりという点に関しては、やはり現地の大学生と触れ合いで感じたことが多々ある。まだ日本に行ったことがないと言っている院生の1年生が、日本語をペラペラと操っていたり、皆が自国の政治のことや歴史のことを語れることは、私にとっては相当な衝撃であったし、また同時にとてつもない恥ずかしさや惨めさを感じざるを得なかった。私は英語を6年以上勉強しても大して理解出来ないものや、受験知識では太刀打ちできないものを、ドイツやフランスの学生はいとも簡単に操っているように感じた。でも彼らと触れ合ってみて、それが才能の違いや国の違いでもなんでもなんでもなく、ただ努力の違いであるとわかった時、同じ大学生としてなお一層その恥ずかしさは増した。彼らの知識はとてつもない努力の下に存在するのであって、そこには私の何倍、何十倍もの勉強が存在している。私は人に胸を張って「勉強した」と誇れることが大学生になってから果たしてあっただろうか？何のために大学に入ったのかをこの旅行中ずっと考えていたし、同時にこれがきっかけで、今の何の目的もなく過ごしている自分を今後変えることができるかもしれないと思った。普通の旅行でこのように他国の大学生と討論をしたり、授業をしたりなどはなかなか出来ないことであると思うし、じぶんにとって今回の旅行がとてつもない価値を持つことを再実感することのできたと思う。

これまでずっとヨーロッパの人々という点で感想を述べてきたが、今度は視点を変えてヨーロッパの土地について述べたいと思う。

ハイデルベルグやアルザスの街並みは本当に圧巻だった。絵葉書にあるような景色が一面に続き、文化遺産の数々は衝撃的だった。何がすごいと言えばその歴史の重さであろう。日本は木造の建築物や地震が多いことより、昔からそのまま存在するものがあまりないのは仕方のないが、家一つ一つが15世紀や16世紀、もっと前から存在し、昔から姿形を変えことなく現在に存在するヨーロッパの姿を目の当たりにした時、単純に羨ましいなと思った。その歴史を感じる度に、何百年も前の人々がこの建物に住んでいたか、あの歴史的偉人もこの景色を見ていたのだという事実に思いを馳せ、言葉じゃ表せない感動を逐一感じた。これは日本じゃなかなか味わえない感覚であり、旅行を終えた今でも記憶にこびり付いている。

また、観光していてとても印象的だったのが、教会の存在だ。私自身キリスト教とあまり馴染みがなく、教会に入ったことすら数えるほどしかないのだが、今回いくつもの教会を見るに当たってキリスト教という宗教の権威の大きさにとても驚いた。イエスの巨大な

像がそびえていたり、美しいステンドグラスがあちらこちらにあったり、ものすごく細かな装飾があちらこちらに散らばっていたりと、声が出せない程の感動を味わった。写真なんかじゃ伝わらない、何か上手く表現出来ないような、一種の不気味さすら感じられる空間がそこにはあった。大きな教会に至っては、その教会を作ろうと言いだめた人は、その建設の完成を見ることなく亡くなったと聞いて切なくなったが、しかし今でも多くの人々がミサに訪れている様子を見て、宗教が人々に与える影響の大きさというのを再確認した。丸山真男の書籍を読んでも宗教について触れることは多かったが、海外に根付く宗教という存在は、私たち日本人にはなかなか理解を深めるには難しい問題であるとも思った。

またアルザスという地を拠点に活動するにあたって、日本ではあまり目にすることのない第一次・第二次世界大戦の影響というのを直に感じる事ができたことも興味深かった。例えば4日目に見たオーケニスブル城は、かつてフランス領であった土地をドイツが奪い返した際に建てられたものにも関わらず、第一次世界大戦を経て再びフランス領となり、いまやフランスの観光名所となっている。そのようにアルザスの至る地方ではドイツ領だった影響からか、ドイツの影が至るところに残っていて、木組みの家だったりはその象徴であると思った。また、ハイデルベルグ城から見た景色と、ストラスブールのノートルダム大聖堂から見た景色は、違う国であれどどこか似たような雰囲気を感じたのはそのためかもしれないと思った。

全てにおいて初めてな経験で、日本との些細な違いに驚くことばかりだった。でも何より今回の旅を決心して良かったことは、国籍を問わないたくさんの人々と関わったことと、今まで知らなかった世界を見ることができたことである。その世界を見て学んだこと・考えたことは次の考察に書くとして、この感想についての話を終えたいと思う。

B

この旅行を通して、私は一体これからどうやって生きていきたいのか、という問いかけを自身へ何度も繰り返した。今まで目的もなく生きてきた自分の姿がこの旅で浮き彫りになったのだ。自分を見直す良いきっかけになったと思うし、これまでのモヤモヤしていた将来像をもっとはっきりさせたいとも思った。

今まで私は苦手な分野は逃げ、好きなものにばかり手を出してきた。今回の発表をするにあたっては、苦手な政治の話や社会学のようなものを扱わなければならなかったため、非常に苦勞した。発表準備の段階でも、終始誰かに手伝ってもらってやっと内容を理解することができるという状態だった。どうにか発表準備は周りに手伝ってもらって頑張ることができたものの、2日目のハイデルベルグ大学での討論では、グループ内という意見を出しやすい環境での話し合いだったにもかかわらず、私は何も発言することが出来なかった。向こうの学生は自国の歴史や政治、または他国との外交までたくさん知っており、その知識の量に驚くと同時に、私はこんな初歩的なことすら分からないのかとひどく自分がちっぽけに思えた。

それからの講義はその悔しさを活かして、わからなくても良いから積極的に意見をしよう心がけた。最初は遠慮や間違っているかもしれないという恥ずかしさがあったものの、そのうち自分の意見がその会議の場で価値あるものと見なされた時の嬉しさが勝るようになった。また、思っていることを発言しないでは何も変わらないという思いもあって、気づけば最後にはもう恥ずかしさはなくなっていた。しかし慣れていないことであつたために、日本語にまだ慣れていない方々相手に上手く言葉を表現できることか出来なかったのが心残りだ。思っていることを瞬時に言葉にすることは想像以上に難しく、でもそうやって自分の考えを相手に伝えたいと頑張ろうとしている自分が、この旅行で私が成長したと感じられる部分だった。

また、今回私が色々と自分を見つめ直すことができたのは、人とのかかわり合いの影響が大きいと思った。先程も書いたが、ドイツやフランスの院生たちはとても優秀で、自分もこういう人間になりたいと思わざるを得ない魅力があつた。今まで関わってきた友人たちとはまた違い、私には彼らが「生」というものに充実した人間に見えたのだ。学ぶということを、私は人間にとってとても大切な要素であると思っている。学ぶことによって視野が広がり、生きる可能性は広がっていくのだ。今まさに私は彼らに学んで生きる可能性を広げようとしているところであつて、新しい出会いはこうして私に相当な衝撃を与えたのである。

将来こうしたい、ああしたい、という具体的なビジョンが生まれたわけではないが、今回の旅行をきっかけに、私の人生観が変わってきたのは確かだ。ただ単純に、もっと勉強したいと思った。一つ理解できる言葉が増えれば、何倍も世界が広がる。言語を増やさなくても、ただ一つ知識を増やせばそれが何倍になることを知った。ならば今まで適当に目的もなく生きていた自分は置いていって、しっかりと地に足ついて生きていきたいと思った。そのためには私は目先にある勉強を、今までよりも一生懸命に取り組んでいくことが大切であつて、また新たな出会いを自分から掴み取っていくことも時には自分の成長のために必要なことであるということを知れた旅行であつた。

⑤

A

1. ゲーテ関連について

ここでは私が最も敬愛する人物のひとりであるゲーテと、今回の研修での関わりについて述べる。

・2月4日(1日目)

成田空港からフランクフルトに到着。フランクフルトはゲーテ生誕の地であり、自分にとって親しみを感じる地である。ゲーテ生家を訪ねられはしなかったが、彼の生まれ故郷の空気を味わい、地を踏みしめられたことは、彼の息吹を感じられる貴重な出来事であつた。

た。

・2月5日(2日目)

ハイデルベルグ城はゲーテが幾度と訪れたスポットのひとつである。彼は60歳を過ぎても、この城まで登ってくるほどに、この場所が好きだったらしい。しかも当時40も年下の彼女と共に訪れたというのだから驚きである。もしかすると、この城は彼にとってお気に入りのデートスポットであったかもしれない。

またテオドル橋を絶賛しており、「この橋からの眺めにかなう橋は、世界中どこにもない」という言葉を残している。

ゲーテが見た景色を、いまの自分が目にしている。これは彼の視点に立てたということである。きっと実際にゲーテが見た街並みと現在の姿は異なるだろう。それでも彼と私が同じ道を辿り、時間を超えて同じ空間を共有できたことに変わりはない。この時私は彼から「この橋の眺めは世界一だろう？」と呼びかけられた気がした。もしかしたら、彼の魂はいまでもまだ度々ハイデルベルグを訪れているのかもしれない。

・2月8日、9日(5、6日目)

ストラスブール大学は、ゲーテが法学を学んだ学府である。彼はここで親友となるヘルダーと出会い、後に2人はシュトゥルム・ウント・ドラング(疾風怒濤)と呼ばれる新しい文学の表現を生み出していくこととなる。

現在のストラスブール大学はゲーテが通っていた当時の様子とは、やはり異なるだろうが、それでも銅像を拝めたことで、一気に「ゲーテがここで生きていた」というリアリティが込み上げてくるものだった。ドイツ生まれの彼と日本生まれの私、その両者の人生がストラスブールで一点に交わったのである。ゲーテが学んだ大学で自分がいま実際に学んでいることで、自分とゲーテが重なり、同一となる感覚が確かにあった。

ゲーテは21~22歳の頃にストラスブールで学んでおり、二十歳の私とほとんど同じ年齢の時である。ゲーテは私と同じ年齢の頃にいったい何を考えていたのだろうか。やはり恋愛に身を注いでいたのだろうか。彼はこの地でフリーデリケとう女性に恋をしたので、恋多き

学生時代を謳歌していたに違いない。

6日目にカテドラルへ向かう途中でゲーテの下宿跡を確認できたことで、彼の青春時代を想像することができた。またカテドラルの展望台につながる螺旋階段を彼も上ったのだと聞けば、疲労や負担なんて気にしてはもらえず、上るしかない。一段一段進むごとに、「もしかしたらゲーテが待っているのでは」と変に妄想する気持ちも高まっていくものだった。展望台は非常に風が強かったが、ここからシュトゥルム・ウント・ドラング(疾風怒濤)の風がうなりを上げているのだと思えば、気にするまでもなかった。

・このように、今回の研修ではゲーテに縁のあるスポットの多くを訪れることができた。私はゲーテなくして、いまの自分は存在しないと言えるほど、彼に影響を受け続けた人生を送ってきた。時を超えてゲーテに出会えた感動は、これからまたゲーテと共に歩む私の

人生の 新たな出発点となりえるものである。

2. 全体的に

・出発前 今回の研修に向け、グループごとに協力して発表準備することになっていた。しかし今回、

私は班内のチームワークを乱してしまうこととなった。パワーポイントの作成ではひとりで突っ走ってしまい、鈴木さんと小林君と認識を限りなく共有することを怠ってしまったと言える。もし私が不慮の出来事によって発表に参加できないとなったら、2人に多大な負担をかけてしまう可能性もあった。

法政に入学してこの2年間、おせじにも外交的であったとは言えない自分の性格のツケがここに来て回ってきたのだと思われた。内向的であることを否定するわけではないが、チームのメンバーとして上手くやっていけるだけの立ち振る舞いを身に着けるべきだったと、猛烈に後悔した。

・2月4日(1日目)

フランクフルトに到着。若干雨が降ってはいたが、呼吸すると空気が日本より乾燥していることに気付く。

ホテルで鍵が二重に回す必要があることを知る。CEEJAでも同様の仕組みであり、これはヨーロッパにおいては防犯対策の結果なのかと思われた。

夕食のハンバーガーはこれまでのハンバーガー像を覆すものであった。バンズなどの材料や、ボリューム、特にポテトがスティック状でなく、厚切りであったという違いには驚くものがあった。6日目にストラスプールのマクドナルドを訪れた際にも、付け合わせのポテトが厚切りであったので、ヨーロッパでのジャガイモの調理方法は異なっているのかと思われる。

・2月5日(2日目)

午前中にハイデルベルグ大学(ドイツ最古)にてクレーマー先生による講義。テキストは山之内靖、法政側からはA班(樋口・今井・米田)のプレゼンテーション、問題提起。日本人留学生のアヤカさん、ドイツ人学生のドミニクさん、ミリーさんと共に議論。

ドイツの学生と議論した中では、話の流れで難民問題に対する政府の対応についての意見が出た。「難民を受け入れるだけ受け入れ、その後の経済的保障などを行えないことには問題があり、治安の維持のためにも早急に対応すべき。しかし、たとえ我々市民が政府に問題の解決を求めても、現実的には処理が困難な課題であり、市民の声が反映されづらいのが現代の社会だ」との意見は、ドイツ人ならではの危機意識なのだと感じられた。

ハイデルベルグ大学の学食は、取ったメニューの重量で金額を割り出しており、日本のメニューごとに金額が設定されている方式とは異なっている。自分がどれほどの量を取ったのか分かりにくいため、お金に困っている時などは調整しづらいのではないかと思われる。

昼食後、ハイデルベルグ大学の学生寮を見学。大学内での自治権が認められていたために、軽犯罪への処罰を大学が独自に行えたとのこと。

夕食のレストランでは人生初のフルコース体験となった。ヨーロッパでは前菜、主菜、デザート、そしてコーヒーという流れに沿って、一品ずつ味わうことが主流である。これは日本の「三角食べ」の文化とは異なり、単品の料理を楽しむことが、ヨーロッパ流なのかと思われた。

・2月6日(3日目)

午前中にアン＝リーズ先生による「障がい」に関する講義。中世ヨーロッパと日本での障害者の生き方の違いから始まり、「障がい」は社会からのレッテルであり、基本的には「障害者」と「健常者」に違いがないとのことだった。

しかしわかってはいても、健常者と障害者が違う存在であるように思われる感覚は私にとって強いものである。これは障害者が健常者とは違うと判断する「認識」の問題であり、アン＝リーズ先生は認識論としての「障がい」について述べているわけではなかった。私のこうした認識を超えて、障害者を自分たちと変わらない、人間として捉える必要があることを先生は訴えていたのだと思われる。

また現代において障害者の就労問題の解決を急ぐべきことは確かである。そう考えると中世日本の琵琶法師、河原者といった障害者による職業集団が認められる社会はある種の理想像にも感じられた。しかし現代の資本主義社会においては、個人の物的な生産性が重視されるため、文化面での就労を支援する動きは起こりにくいと思われる。

午後はコルマール観光。昼食はカフェでタルトフランベのベジタブルをコーヒーとともにいただく。この時フランスさんから、フランスではコーヒーは食事中ではなく、食後に飲むものだと教えてもらうことになった。言われてみればこれまでレストランや機内食でも、コーヒーが出てくるのは食後であったと改めて気づき、食べ合わせに関する暗黙の了解を垣間見た気がした。

ウンターリンデン美術館では祭壇画を鑑賞。キリストが磔にされた悲惨な光景を祭壇画とするのは、珍しいものだと感じるため、貴重な資料を見ることができた。

キリスト教の信仰や聖書の表現のもとに絵画・彫刻・版画の技術が向上したことが見て取れる。日本では仏教のもとに仏像などの美術が発展したように、宗教によって文化が発展していくことは、世界共通なのかと思える。

・2月7日(4日目)

エクスカージョン 真伊子さんが昨日からの体調不良により休養。他人事ではなく、私もこの頃より鼻づまりと喉の乾燥が顕著に。日本との気候の違いを、身をもって実感することに。

セレスタにてオーケニスブル城を見学。12世紀にはすでに城が建設されていたとのこと。長い間ドイツ領のものであったが、30年戦争などで焼け落ちてしまい、そのまま放置されるなど、紛争の悲惨さを伝えてくるものがある。しかし廃墟となるもヴィルヘルム 2

世により修復され、門には彼の名が刻まれている。そのため 20 世紀に修復されたこの城は建築様式が統一されておらず、今にその姿を残している。

また 1919 年、ヴェルサイユ条約により、フランスのものとなった。ドイツ側からすればせっかく綺麗に直したのにも関わらず、フランスに横取りされたような気分ではなかったろうか。このように、アルザスにおけるフランス・ドイツの確執にひとつなのではないか、と感じさせる経緯がこの城には存在する。

実際に内部を見学すると大砲などが展示され、壁にも弓を射るための穴が開いているなど、防衛の拠点であったことがわかる。しかし場内から見下ろすと、周りが平地なこともあり、アルザスの壮観な景色を目にできる。戦争当時、これだけ素晴らしい景観を前にして紛争をやめようと思わなかったことが不思議でならない感覚があった。

リクヴィルヘショートビジット。「フランスの最も美しい村」のひとつであり、人口は 2000 人未満、そして 2 つ以上の歴史遺産があるなどの条件を満たしている。このように町自体へブランドをつけることで観光を促進させようとする試みはミシュランガイドと同じように付加価値をつける上で効果的と思われる。

またリクヴィルは全体が城壁により囲まれた珍しい町並みである。神聖ローマ帝国時代に築かれた城のものらしく、長らくドイツ領であったことがうかがえる。しかしフランス

革命における紛争をきっかけに以降はフランス領となる。また住民の多くがプロテスタントに改宗した歴史があるらしく、カトリック中心のフランスにおいては珍しいと感じる。第二次大戦での被害を免れ、古き町並みがそのまま残る数少ない地である。リースリングのブドウ畑が近くにあり、ワインの名所でもあるとのこと。

カイザスベルクを訪問。今回の研修ではカイザスベルクとドイツ語で呼んでいるが、現在はフランス領のためケゼルスベールとの呼称が一般的とのこと。時代によって町の呼び名が変わることからも、フランス・ドイツの領有争いの激しさを感じ取ることができた。

・ 2月8日(5日目)

ストラスブール大学にてプレゼンテーション。テキストは丸山眞男『日本の思想』、B 班(鈴木・小林・友基)と C 班(近藤・莉子・真伊子)が発表。先にストラスブール側から発表し、続いて法政側の発表へ。午前中は「日本の思想」の「無構造」、「国体」、「無責任」について。

自分(B 班)の発表については、もっと内容の正確性を詰めるべきだったと痛感した。黒田先生より指摘されたように無責任の体系は天皇と政府のサークル状ではなく、上から下へ下へという上意下達構造の方がより適切であった。事前準備においてハンナ・アーレントの

『人間の条件』やアイヒマンに端を発する「悪の陳腐さ」について調べていたにも関わらず、それらと『日本の思想』とを関連づけられなかったことは非常に悔やまれる。ハンナ・アーレントを発表に取り入れれば、日本とヨーロッパをうまく比べていくことができた

感じられた。またハイデルベルグ大学でも山之内靖テキストを通して、日本とドイツとの近代化についても触れていたため、ヒントがすぐ近くにあったにも関わらず、気付かなかった自分の視野の狭さには後悔の念に駆られるものがあった。

昼食をとったカフェにおいて栄さんと文学について語り合うことができた。私がフランス文学のアレクサンドル・デュマ『モンテクリスト伯』について話したところ、中国語訳でも非常に長編であるために栄さん自身は読んだことはないが、彼女のお父さんが愛読していたと聞くことができた。また、彼女自身は日本の「ライトノベル」といった現代文芸にも興味があるようで、「ライトノベル」に関わる文学の授業において、小説の雛形・模範として『モンテクリスト伯』が紹介されたことがあるとのことだった。フランス文学と日本の文芸との影響関係を捉えることが、フランスでも十分学問として成り立っているほどには、日本への関心の高さをうかがわせるものがあった。

また栄さんの話を聞いて思うのは、フランスでは現代の作品に注目する流れがあり、デュマの作品をエンターテインメント性に優れた名作として認めてはいても、単なる古典としてしか見ていない面もある、ということだ。「国哲」メンバー内でも『モンテクリスト伯』を読んだことがある人がいなかったように、フランス国内でも学生層にとっては縁の遠い作品になってしまっているのかと思われる。温故知新というように、過去の文学に触れようと

する姿勢は日本でもフランスでも弱まってきているのだろうか。

午後は『「である」ことと「する」こと』をテーマに第二部の発表。カミーユさんへの質問では考えがまとまらないままに質問してしまい、彼をひどく困らせてしまった。また二度も村松先生が私の長々とした意見を代わりに要点良くまとめてもらえたことは、自身の能力不足を思い知らされることとなった。黒田先生に村松先生、2人とも簡潔に分かりやすく、ユーモアまでも交えて話されており、私は言葉の使い方も話術も未熟なのだと強く自覚する他なかった。

・2月9日(6日目)

午前中から午後にかけてストラスブール旧市街を観光。カテドラル、プティット・フランスを訪れる。

アルザス地方はプロテスタントの信者も多いが、ストラスブール大聖堂はカトリックの教会であるため、フランス側の宗教的な影響があるのだと思われる。幾千の彫刻によって装飾されたファサードと呼ばれる教会正面から見て取れるように、外装からはゴシック様式と判断できる。しかし聖堂内にモザイク画があることから、ロマネスク様式の面も色濃く残っており、建設方針の変更があったことがうかがわれた。

螺旋階段を上り、展望台へ向かう際、ゴシック様式特有の「フライング・バットネス」と呼ばれる、建物の突っ張り棒部分を間近で見ることができた。「フライング・バットネス」は構造上、高層に位置するものであり中々近づいてみることはできないため、貴重な景色であったと言える。

近隣の美術館によれば、大聖堂は 12 世紀後半より 300 年近い歳月をかけて建造されたとのことだった。またもともと聖堂は尖塔を 2 つ建設する予定だったにも関わらず、資金などの不足などから片側が未完成のまま、現在の非対称的な姿となった経緯がある。また資金は 免罪符の発行によっても集めたとのこと。高校の世界史授業などでは免罪符が宗教改革につながるネガティブなものとして教わったが、世界遺産となるほどの歴史的建造物を築けた元手となった点では、免罪符への印象がいくらか変わるものがあった。日本でも奈良の大仏を作るために税の徴収や、行基が中心となって資金を募るなど、宗教施設の建築と経済には大きな関わりがあるのだと思い知らされた。

午後にはストラスブール大学にてシャルル先生の講義。内容は権田保之助による日本の娯楽について。

日本人が暇つぶしから「暇活かし」へと変化したという表現は特に面白いものだと感じた。明治期の機械化によって、労働者がただ機械の歯車となり、単調な仕事に楽しみを見いだせないために、日本人が余暇を有効活用して楽しもうとするようになった点は丸山眞男の『日

本の思想』を思い出すものであった。『「である」ことと「する」こと』における、休日に日

本人が積極的にレジャーなどを「する」心理と、権田の考えにはつながりがあると感じられた。

また娯楽への規制の問題は現代においてもあてはまると思われる。たとえば日本ではアニメーションや漫画に対して、有識者が教育上の悪影響を考慮して規制を求めることがある。しかしそうした有識者は作品を実際に観賞せず、イメージだけでものを語ることもある。娯楽と有識者の距離間を縮めることは、日本の「アニメ・漫画文化」をより良いものとするためにも必要なことである。

・ 2月 10 日(7 日目)

スイスのバーゼル空港での身体検査が日本の時よりも厳しく感じた。ベルトや靴までも探知機が反応するほど金属に敏感であり、手荷物の中身をもすべて見せる必要があった。研修中に大きな事故などに巻き込まれることはなかったが、ここに来てテロ対策という緊張感をいたく感じる事となった。

・最後に この研修においてはゲートを中心に、文学に縁のある数多くの名所を訪れることができた。このことは私自身の人生においては大事件と言えるほど、重要な経験となった。またアルザス地域圏という、フランス・ドイツ両国の歴史的に複雑な関係を感じることで、単なる観光とは違い、何か緊張感を伴う感覚があった。法政でもフランス・ドイツの哲学者の思想を学んできたが、彼らにも歴史的背景があつてこそ生まれた考えがあると思われる。思想家の人となりや思考背景を正確に捉えるためにも、歴史を見つめることは必須なのだ と痛感するものがあった。膨大な歴史の先を、これから自分が生きていかななくてはならないのだと思うと、双肩に得体のしれない緊張感・責任感が生まれるように感じる。世

界からのプレッシャーを受け止められるよう、私という個人を今一度見つめなおしていきたいと思う。

B

今回の研修を通して自らの一番の課題と思われたことは、私の意見をいかにして相手に分かりやすく伝えるか、という点である。

5日目のストラスブル大学において、カミーユさんへ質問する際、ただ思ったことを長々と述べてしまったため、相手に何も伝わらず、困らせてしまうことがあった。自分の中で一度内容をまとめたうえで、簡潔に話すべきだったと強く後悔することになり、反省すべきポイントでもある。はっきり言えば、私の言葉を聞いてくれる相手のことを全く考えられていなかった

私は相手に正確に伝えようとすればするほど、「あれも言わなきゃ、これも言わなきゃ」と思ってしまい、無駄に話が長くなる傾向にあると思われる。思ったことを全部言おうとするのではなく、伝えるべきことと、伝えなくてもよいことを分別し、要点を絞ることが重要なのだと思われる。

研修準備においても、パワーポイントに言いたいことを盛り込みすぎてしまい、メンバーに思ったように伝えることができないこともあった。また、言葉を言い換えているだけで、

結局同じ内容を延々と述べる癖が私にはあり、一番伝えたいことが曖昧になってしまいやすい点にも気づかされた。

伝えようとしても伝わらなければ意味がないため、相手にとって分かりやすい話し方を意識するべきと思われる。今回の研修においては、異文化理解をする以前に、他者理解をしようとする心構えが不十分であったと言える

他者理解をするためには、自分と相手を使う言葉の意味を共有することが必要不可欠である。自分勝手に自己解釈した言葉を使い続けている限り、意見は独りよがりなもののみである。

正直に言えば、言葉とは非常に煩わしいものである。自分の意見を言葉で表現することは異常なまでにもどかしい。自分の気持ちさえ、言葉で掴み切ることがままならない私たち人間は、互いを本当に理解しあうことができるのだろうか。

しかし言葉を不信したままでは、お互いの世界は閉ざされ、他者理解の可能性はゼロになってしまう。そして逆に、私たちは言葉を尽くせば尽くすほど、思考の世界が広がっていくことも知っている。気持ちを言葉に収めきれないこともあるが、言葉によって思考の力を伸ばすこともできる。この言葉の可能性が、他者理解、ひいては異文化理解へのきっかけになるのだと思われる。

今回の研修を通して、自分がいかに言葉を信用していなかったか、また言葉を使役する人間そのものをいかに信頼していなかったのかを自覚した。普段から本を読むことを心掛

けてはいたが、それは自分のためだけに行っただけのこと。誰かに何かを伝えようと、言葉にこだわる姿勢が全くと言っていいほどに欠けていた。

これからの大学生活においてもレポートや発表、最終的には卒業論文など、自分の主張を伝えるシチュエーションは限りなくある。そのうえ大学に限らず、他者と対話することは一生継続していく。齟齬やすれ違いを生まないためにも、相手の言葉と人となりを受け止め、相手に分かりやすい形で自分の言葉を投げかける意識が必要となってくる。

幸い、これから春休みとなり時間に余裕が生まれてくる。この期間に過去の自分のレポートを精査し、話し方が上手い人の模倣を試み、そして並行して家族や友人など、身近な他者と言葉や思いをやり取りしあおうと思う。

言葉を信じ、他者を信じること。そんな思いやりのある人間を目指すことを、国際哲学特講の教訓としたい。

⑥

A

まず、今回の研修旅行で最も印象的だった点は、やはりヨーロッパの学生の日本語能力の高さである。我々のドイツ語、フランス語とは比べ物にならないほどの流暢さであり、我々の語学能力の低さを実感した。それと同時に、日本語の難しさを再認識した。接続詞、多くの助詞、主語のあいまいさ、などはネイティブでない人間にとって戸惑うことであろう。しかし一方で、私のドイツ語が伝わることへの喜びも感じた。実際に英語を使いことはよくあるが、ドイツ語となるとなかなか使うことができない。そのためはじめは伝わるか不安であった。飛行機の中で、レストランで注文するとき、ライターを貸してくれと頼まれたとき、ドイツ語はとても役にたった。一方フランス語はほとんど挨拶以外できない。そのためフランスに渡ってからは歯がゆい思いが続いた。そのフランスで役に立ったのは英語であった。英語の世界共通語としての機能はこれからより重要になるであろう。

次に大学の広さがあげられる。法政大学も多くの学生が所属する大きな大学であるが、ハイデルベルク大学、ストラスブール大学、どちらも比べ物にならないほど広く、きれいで、設備も整っていた。これはひとえに国が教育研究施設に多額の税金を投入しているからであろう。国費によって運営されている日本の国立大学も、今や独立行政法人化され、財政は厳しくなっている。国の若者への態度がここではっきりと表れる。

それから食事の量と味である。毎回の食事がおいしく、そして量が多かった。肉が多く、パンとパンでパンがかぶってしまうことも普通であった。魚は鮭とタラぐらいなもので日本の魚が恋しくなったが、日本に戻ったらドイツとフランスの食事が恋しくなるのかもし

れない。また、海外で生活するためには言葉の前に丈夫な胃が必要なのだと痛感した。アメリカに住む友人は日本に帰ったとき、日本で育てた日本のお米を日本の炊飯器で炊いて食べたいといていた。今ではそれがよくわかる。ライスもあつたがぱさぱさ、もしくはジャポニカ米ではないものしかなかった。

最後に人間についてである。街の人、学生、お世話になった先生や CEEJA の職員、すべての人がやはり人であったと感じた。日本であっても、ドイツであっても、フランスであってもそれは変わらないと感じた。道を聞けば親切に教えてくれ、「Japanisch?」ときかれ「Ja」と答えれば「こんにちは」とあいさつしてくれる。そんな人たちは日本であってもヨーロッパであっても存在する。見ず知らずの人にライターを貸してくれと言われ、タバコを一本くれとまで言われた。そんな簡単な会話が深く印象に残っている。

B

今回のドイツ、フランスでの体験で得たものは、やはりなんといっても達成感が第一であろう。樋口さん、米田さんの二人と作り上げた発表を無事にやり遂げたことは何よりの収穫であった。もはや発表したのがはるか昔のように思えてならないが、我々の考えた問題についてドイツの学生と議論するのはとても有意義であった。山之内の論文は難解でありこれを問題とするのは困難であったが、ドイツの学生も一緒になって考えた答えはきっと我々の糧となると信じている。また、哲学と社会学の視点の違いも学んだ。樋口さんは社会学と哲学は和解できないといていたが、私は社会学的なデータに基づいた哲学もまた重要であると考えた。また、社会学にもミクロの視点に立つ重要性は少なからず存在する。どこまでを社会学とするか、どこからを哲学とするか、と考えるのではなく、包括的に考えることが必要であろう。

次に友人である。ドイツで会った人たち、フランスで会った人たちはもちろんであるが、この国際哲学特講の履修者との仲も今回の研修で進展した。またそれだけではない。成田空港までのバスで知り合った友人もいる。ベトナムから来たという男性と空港に着くまでのバスで話し込んだ。また、空港でお互いの連絡先も交換した。旅行は家を出た時から帰る時まで、このことを実感した。

3つ目は思い出である。樋口さんは常々安孫子ゼミの学生の国際哲学特講履修者の会話についていけないことを後悔していた。我々は今回の研修でその会話をするようになった。はじめての海外にふさわしい様々な思い出ができた。そして海外の近さを知った。この思い出はきっと今後海外に目を向けるにあたってとても有用なものとなるであろう。実際、この夏のウィーン行きを現実に行うと思った。もっと知らないところへ行ってみようという好奇心が、この思い出によってより強くなったと思う。また、この思い出によって日本への見方が少し変わった。ドイツ、フランス、どちらも素晴らしい国であるが、日本もまたいいところはたくさんあるとこを再認識した。もちろん街の美しさは負けてしまう。どこも戦争によって焼き尽くされてしまい、ドイツやフランスのように街並

みが残っているところは数少ない。しかし、文化などドイツ、フランスに負けないところもある。日本とドイツ、フランスどちらの良さも知っている人間になれたことは今後の人生にとって大きいと思う。

4 つめは沢山の写真である。一眼レフを担いで出かけた甲斐があったというものである。アニメのモデルになった街、世界ふれあい街歩きで見た店、どれも現実に目の当たりにすると感慨もひとしおである。写真を見返すと、笑顔で写っている集合写真、美しい街並み、どれも思い出を掻き立てる。この美しい写真で、我々のみならず先輩たち、後輩たちにも我々の思い出の共有ができればと思っている。そして後輩たちには、この写真をみて国際哲学特講に興味を持ってもらえればと思う。準備も研修もとても大変で体力も精神力も使い果たしてしまうが、今振り返ってみると、そのどれもが楽しかった思い出であり、あれだけ悩んだ準備でさえ話し合いながら少しずつ自分たちの答えを出していくのは楽しいものであった。それを写真を通して我々以外に人たちにも共有したい。

最後にワインである。2008年ものの Gewurstraminer (35.4 ユーロ) はまさにひとめぼれであった。高価ではあったがこれはそれだけの価値がある。甘いがしつこくない甘さでデザートとして最高であろう。ほかにも 2013年ものの Gewurstraminer は辛すぎないよい口当たりであっさりした料理に合いそうだ。母親と一緒に飲もうと思う。また、今回の研修で良いワインの味を覚えてしまった。日本で売っているテーブルワインでは満足できずそれなりのワインを買ってしまうようにならないか心配である。

まとめとして、今回の研修ができるのも協力した仲間、理解してくれた親、バックアップしてくれた大学、そして安孫子先生のおかげであると感じる。一人旅とはまた違う、ただ議論して発表するのもまた違う、この国際哲学特講でしかできない経験をした。この経験は一生の宝物になるだろう。

⑦

A

印象的だった点

・景観の美しさ

街中、郊外共にとても綺麗だった。また、CEEJA 周辺のブドウ畑はその美しさに加え、面積の広さにも驚かされるものだった。

・日本語能力

こちらがほぼ通常通りの速さや表現で話しているのに対し、ほぼ滞りなく意志の疎通が出来たことはただただ驚くばかりだった。そしてここまで日本語を学んでくれたということが何より嬉しかった。

・大学の大きさ

どこからどこまで大学なのか把握できないような敷地面積の大きさもそうだが、過去に自治権を所有していた等の規模の大きさにも驚かされた。

・キリスト教の規模

美術館の芸術作品や大聖堂など、如何にキリスト教が中世のヨーロッパにおいて巨大なものだったかを実感することができた。ミサの見学をした際、一番前に座っていた為外に出るタイミングを逃し、周りが皆讃美歌を歌い始めた時は正直冷や汗をかいた。

・食事量

想像していたよりはましだったが、かなりの量だった。とはいえ、これだけの食事をきちんと取れたからこそタイトなスケジュールを乗り切ることができたようにも思える。

B

この研修で得られたもの

今回の旅行で得られた最も大きなものは、「全力で打ち込む気概」である。そもそも国際哲学特講を受講しようとした一番の理由は、「行く前と後では授業に対する姿勢が変わる」という話を聞いたからで、この点に関しては間違いなく想像していた以上のものを得ることができた。異国の地にも関わらず日本語で何不自由なく会話が成立するという実体験は衝撃的であり、逆にフランス語で会話の出来ない自分の無力さも痛感することになった。この無力さを実感できたことは本当に良かったと思う。帰国したら言語学にも力を入れていきたい。そして現地の学生だけでなくOBやOG、四年生の先輩方と交流でき、現在までの経緯や海外に対する姿勢を聞いたことも「全力で打ち込む気概」を更に大きくする要素であったことも間違いない。

また、数多くの芸術作品に触れられたことも非常に幸運であった。個人的な趣味として絵を描くことがあるのだが、美術館での絵画のみならず彫刻作品や近代芸術に多く接することで創作意欲が大いに刺激させられ、今後の活動への大きな糧となった。そして芸術作品のみならず、美しい街並みや中世の甲冑、城なども大変刺激的で、自分のような素人でさえそうなのだから、かの宮崎駿監督の創作に多大なインスピレーションを与えたであろうことは容易に想像できる。

総じて得るものの多かった今回の研修旅行だが、やはりスケジュールのタイトさに関しては言及しておかねばならないだろう。時間に見合う以上のものを得ることができたとは思いますが、少なからず健康に影響のあった学友がいたことも事実である。中々難しいところではあると思うが、質を保ちつつ余裕を増やす方法を考える必要があるだろう。

⑧

A

私は今回初めての外国でした。10時間を超えるフライトも初めてでした。なのでドイツに行く前から驚くことばかりでした。機内食はおいしいし、キャビンアテンダントの方々はずっと働いていて、お水など何回も提供していただきました。長いフライトの末、ドイツのフランクフルト空港に着きました。空港の外に出てみると、歩いている人は外国人だけど、周りの景色はまだ日本と変わらないような感じがしました。しかし、ハイデルベルクに向かうバスの中やハイデルベルクの町を見た時に、外国に来た実感がしました。

2日目は、ハイデルベルク大学に行きました。合同ゼミでハイデルベルク大学の学生さんとディスカッションをしました。行く前はちゃんと議論できるか心配だったのですが、当日はしっかり発言できました。韓国の留学生とドイツの学生とディスカッションをして、育った国が違うと考え方違うことを感じました。時間が短かったので、議論が最後まで出来なかったことが心残りでした。お昼は、法政の食堂とは全然違うおしゃれな食堂でご飯を食べました。午後は、学生率やハイデルベルク城を見に行きました。大きなワイン樽も見て、ハイデルベルクという町の歴史や特徴について理解できた気がしました。夜は、バスに乗ってドイツからフランスに移動しました。今まで県境を越えたことはあるが国境を越えたことはなかったので、ライン川を超えると、とても気分が良かったです。この日に、ヘイさんとフランスさんに出会いました。二人と出会えたことがこの研修で一番の収穫かもしれません。

3日目は、CEEJA でミトゥー先生の講演を聞きました。障害者と社会についての講演で、先生が障害者に目を付けたことも興味深かったし、比較や歴史について学べて良かったです。午後は、コルマールに行きました。私は「ハウルの動く城」を見たことはないのですが、街並みを見て、映画を観ようと思いました。お店のマーク（看板）が凝っていたり、一軒一軒の家がカラフルで窓がハートだったり、町全体が美術作品のようでした。ウンターリンデン美術館では、貴重な扉絵を見れて良かったです。加藤さんのガイドがとても内容盛りだくさんでとても為になりました。自由時間ではヘイさんとフランスさんと回りました。おすすめのお店を聞きながら、色んなところに行きました。また、フランスのスーパーにも行きました。

4日目は、体調不良で一日 CEEJA で寝ていました。

5日目は、ストラスブール大学で合同ゼミがありました。私は午後に発表をしました。今回初めてプレゼンテーションをしたので、とても緊張しました。一つ前のカミーユさんの発表があまりにも難しくて、良く調べられていて焦りました。動揺していたのですが、とにかくゆっくり話すことを心がけました。頑張って質問に答えようと気合を入れてたのですが、貧血になってそのあとの議論にもあまり参加できなくて残念でした。夜はストラスブール大学のティファニーとジュリアンが CEEJA に来てくれました。二人は本当に日本

語が流暢で驚きました。ジェスチャーゲームも楽しかったです。

6日目は、カテドラルに行きました。とても大きかったです。正面の壁にたくさんの像がっていて、それがまるで日本の三十三間堂のように感じました。また300段を超える階段を上ってバルコニーまで行きました。あんなに高くまで、石を積み上げて作っていることに、当時の人の技術に感動し、それだけの建物を作らせるキリスト教の偉大さを肌で感じる事が出来ました。午後は、ストラスブール大学でシャール先生の講演を聞きました。権田保之助の民衆娯楽論についてでした。近代化する前の日本人は仕事と娯楽が同じという事に驚きました。近代化は私たちに便利ということをくれたが、仕事を義務にしまったので、楽しさを奪ってしまった。

7日目は、日本に向けて帰りました。機内食の日本食で、ようやく日本に帰るという実感が分かりました。

今回の研修でいろんな人と出会って、彼らのものすごい量の努力を目の当たりにして、私の努力は彼らの1%にしか満たないと感じました。まずは、春休みにフランス語検定の勉強をしようと思います。

B

この研修で最も学んだことは、第二外国語を学ぶことは本当に大変なことだということです。ハイデルベルク大学・ストラスブール大学どちらでも言えることです。ハイデルベルク大学の学生が週に日本語を学ぶ時間は16時間だと先生から聞いていました。私がフランス語を学んでいる時間は週に90分です。申し訳ない数字です。ディスカッションでは、何一つ不自由なく議論できました。テキストに載っている山之内の文章も日本語で驚きました。またこの時の法政の発表は英語で、英語でも理解できているので、さらに驚きました。ストラスブール大学の学生はマスター2年生は「日本の思想」をすべて日本語に訳したということを知りました。とても時間がかかっただろうなと思いました。そして、カミーユさんの場合は「日本の思想」の他にも参考文献で何冊もの本を日本語に訳して読んだと聞きました。それに対して私は自分の母国語である日本語で読んでいるのに、難しいと悲鳴を挙げていたことが恥ずかしく感じます。

以上のことから、私にはもっと努力が必要だと感じました。今私は取りたい資格が3つあります。なので春休みはその資格の勉強の時間に充てたいと思います。まずは毎日コツコツとしていこうと思います。

今後活かしていきたいことは、今回の研修で初めてプレゼンテーションをして、パワーポイントの使い方や発表の仕方を学んだので、ゼミの発表などで頑張っていきたいです。伝えたいことを簡潔にスライドに書いて、それ以外は口で説明するという事を知りました。これは社会人になっても使うものだと思います。また異文化に触れたので、逆に今度は外国の人に日本の文化に触れてほしいと思いました。日本の文化に触れてもらうにあたって、私たちは語学を頑張る必要があります。2020年にはオリンピックもあるので勉

強して損はないと思います。日本の良いところを外国語で説明できるようになりたいです。今回は私が日本語でカミーユさんに説明してしまったので、今度はフランス語で説明できるようになりたいです。

今回学んだことというより気付いたことなのですが、私は人より外国の油が合わないことが分かりました。普段はご飯中心の食事で、あまり外食もしないので、慣れていなかったようです。また今度外国に行くために、日頃から訓練しようと思いました。

最後に、普段授業ではあまり発言しない私ですが、この研修を通して少し変わったように感じます。一つのことを理解するのに時間がかかりますが、本を読んで色々考えることの楽しさが分かりました。授業のレポートが毎回大変で辛かったけど、どういう風に課題にとり組めばよいか、向き合えばよいかを知ることが出来てとてもよい収穫を得たと思います。最初は授業を取るか悩んでいたけど、取って良かったと思いました。この授業で、研修で、私は一皮むけたような気がします。NEW 清水になったと思います。これからもっと変化していきたいと思います。何枚も皮がむけるように、研修で出会った学生さんたちに負けないように、日々努力をしていきたいと思います。こんな貴重な経験をさせていただきありがとうございます。
